

1. はじめに

(1) 人口ビジョンの位置づけ

白馬村人口ビジョンは、本村における人口の現状を分析し、人口に関する村民の認識を共有したうえで、今後目指すべき将来の方向性と人口の将来展望を提示するものです。

(2) 人口ビジョンの対象期間

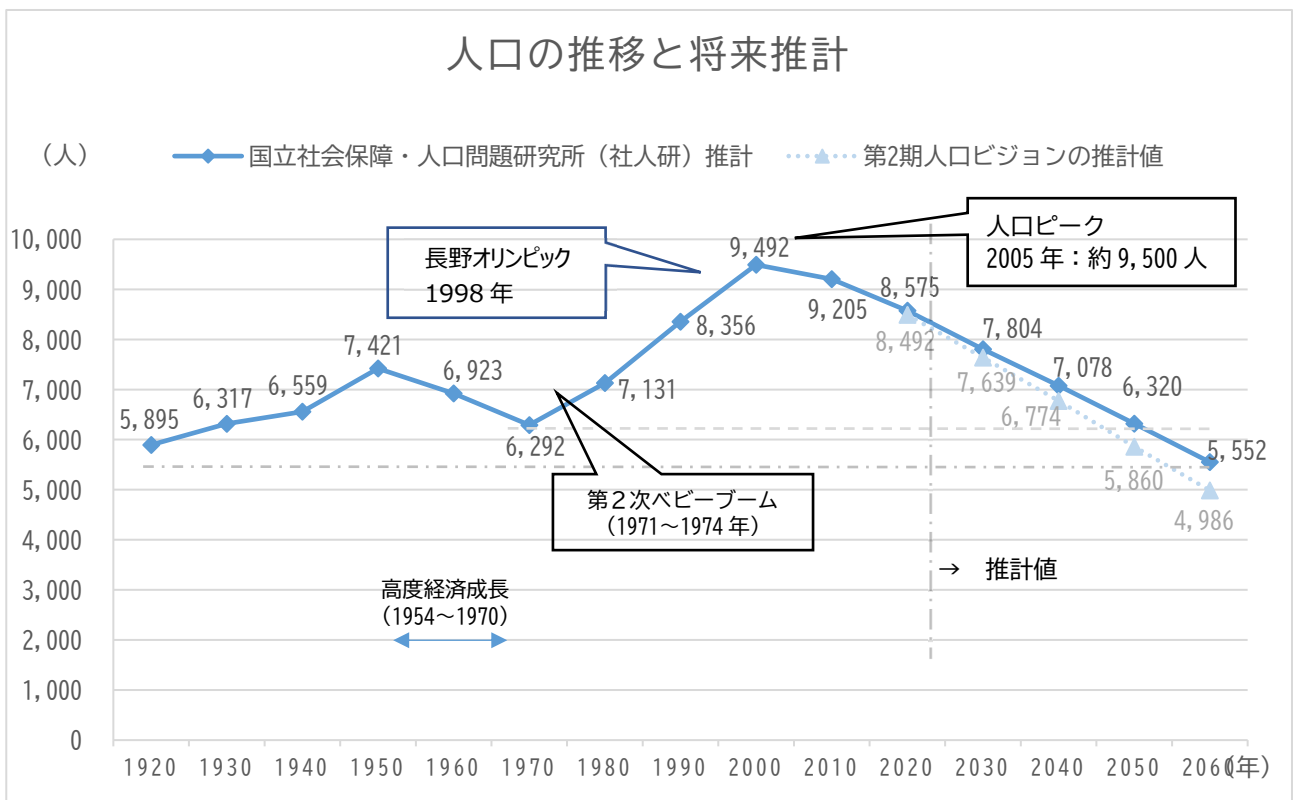
白馬村人口ビジョンの対象期間は、国の長期ビジョンを踏まえ、2060年（令和42年）までとし、長期的な視野に基づいた展望を示します。

2. 人口の現状分析と将来推計

(1) 人口の動向分析

ア 総人口の推移と将来推計

1950年（昭和25年）から1970年（昭和45年）にかけて人口の減少が見られましたが、1970年（昭和45年）以降は増加に転じ、2005年（平成17年）の約9,500人をピークに再び人口減少の局面を迎えました。5年前の推計値と比べると減少はやや緩やかになると見込まれますが、2050年（令和32年）には、1970年（昭和45年）の水準まで落ち込むことが予想され、2060年（令和42年）には、ピーク時と比べて4割程度人口が減少して5,500人程になると推計されます。



出典：国勢調査、社人研

## イ 年齢3区分別人口の推移と将来推計

### ① 年少人口

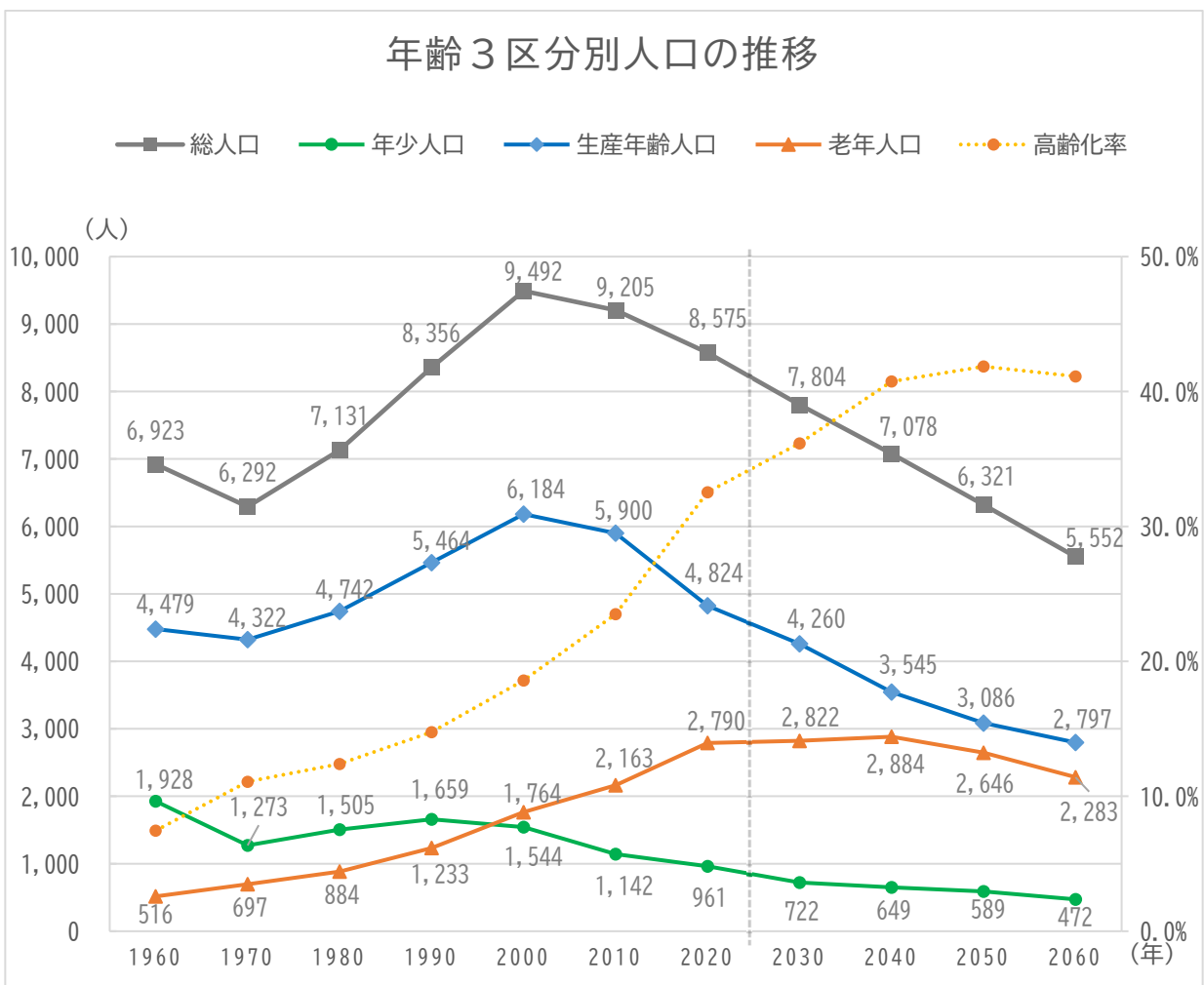
1970年（昭和45年）から1990年（平成2年）まで増加しましたが、その後は減少に転じ、2020年には1,000人を下回り、20年前と比べて3分の2まで減少しました。今後も減少し続け、2060年（令和42年）には500人を下回ると予想されています。

### ② 生産年齢人口

総人口のグラフと、ほぼ同じ曲線で推移し、2000年（平成12年）の6,184人をピークに減少局面を迎えました。2020年時点でピーク時と比べて2割以上減少し、地域社会の担い手の減少が大きな課題となっています。今後も減少し続け、2050年（令和32年）にはピーク時と比べて半減すると見込まれています。

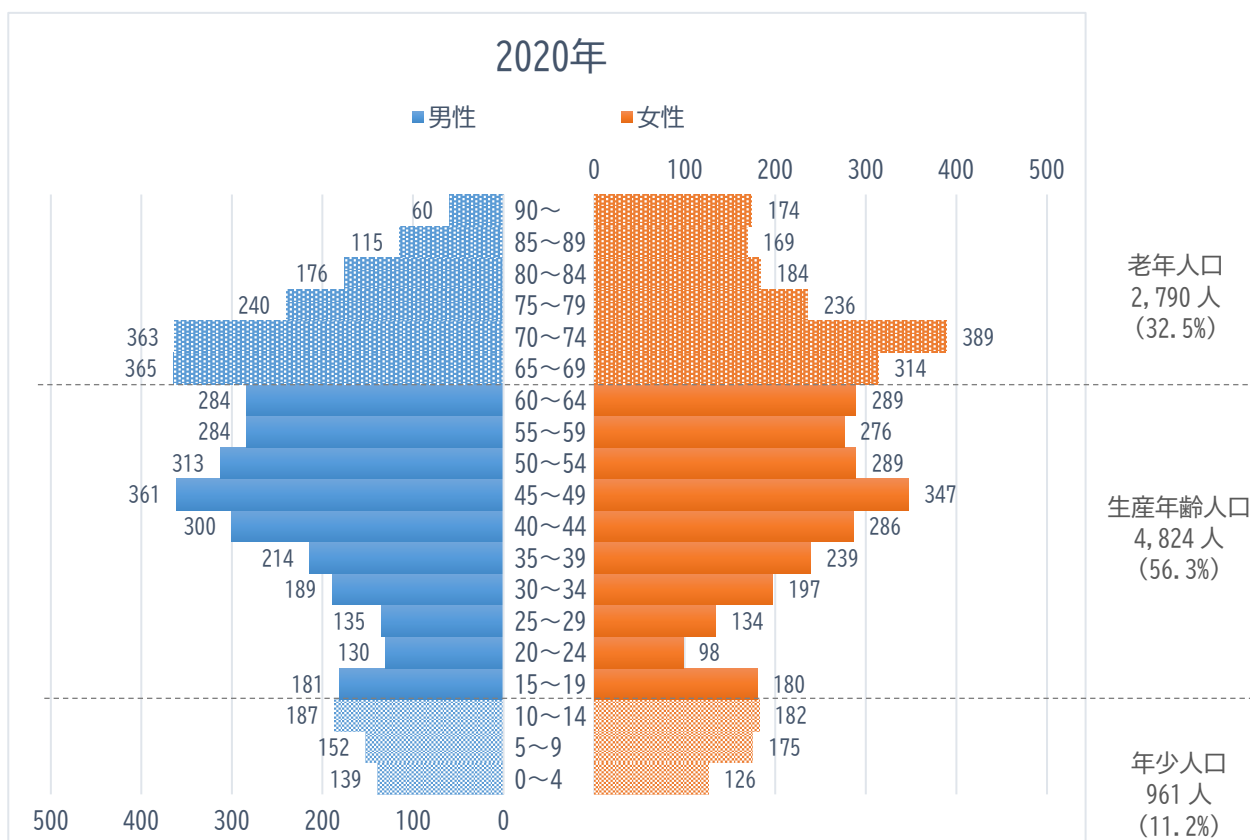
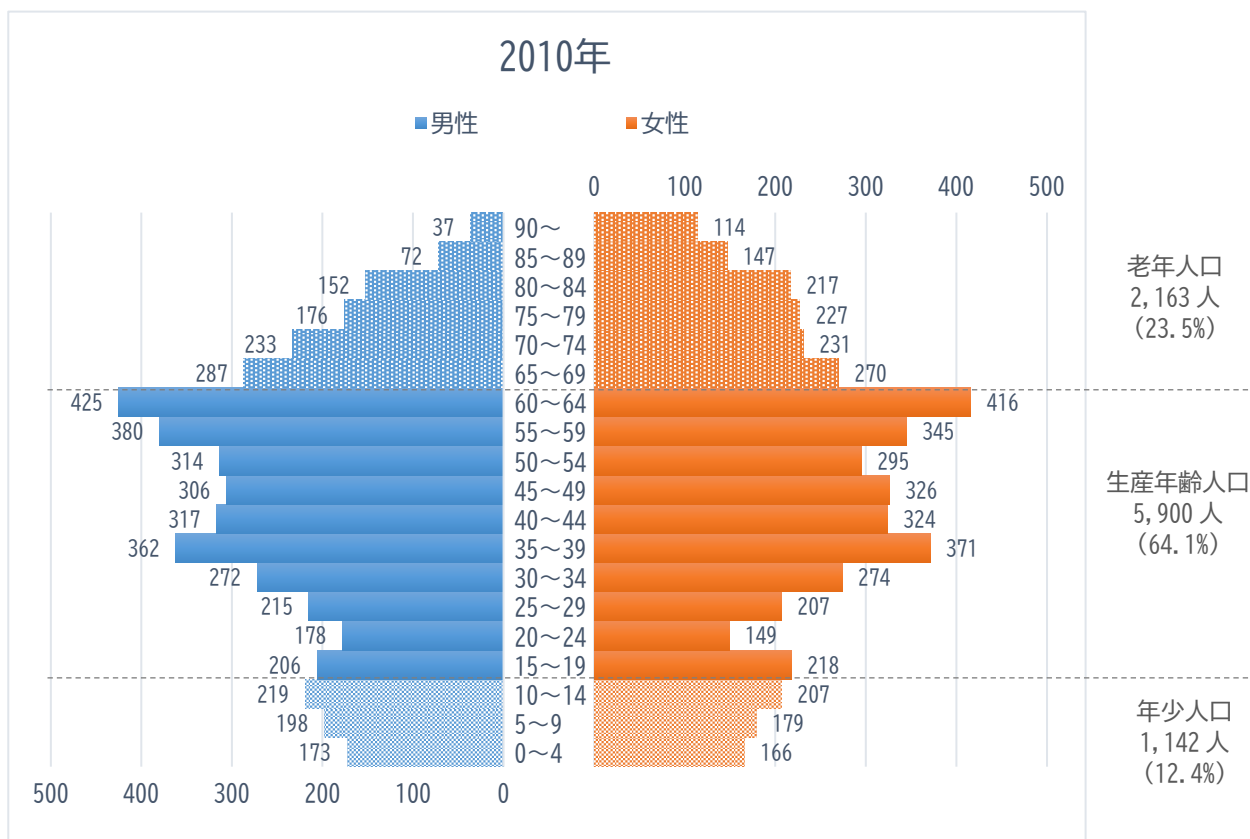
### ③ 老年人口

2030年頃まで増加し続け、その後横ばいから減少に転じると推測されています。この30年間で2倍以上になり、シニアの活躍が欠かせない時代を迎えています。高齢化率は2050年（令和32年）の約42%をピークに減少していくと推測されています。

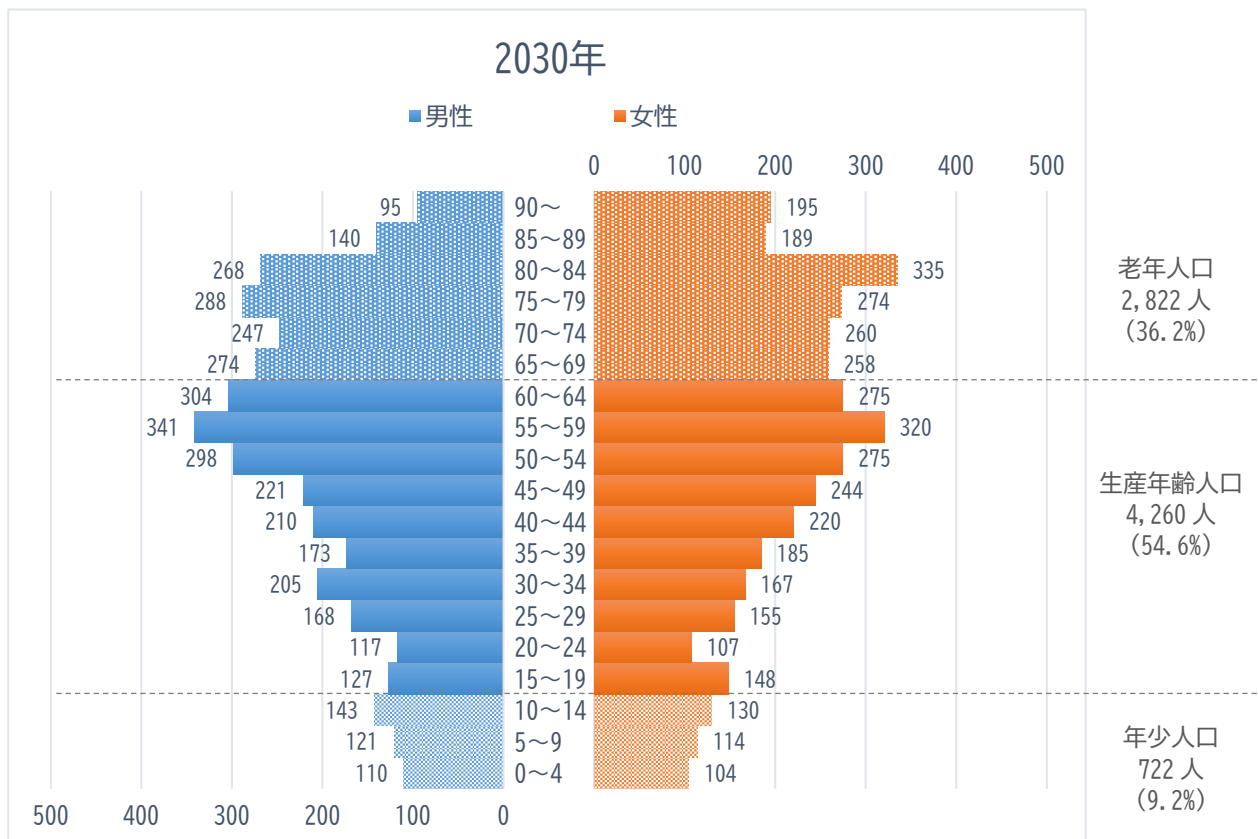


出典：国勢調査、社人研

## ウ 人口ピラミッドの変化



出典：国勢調査、社人研

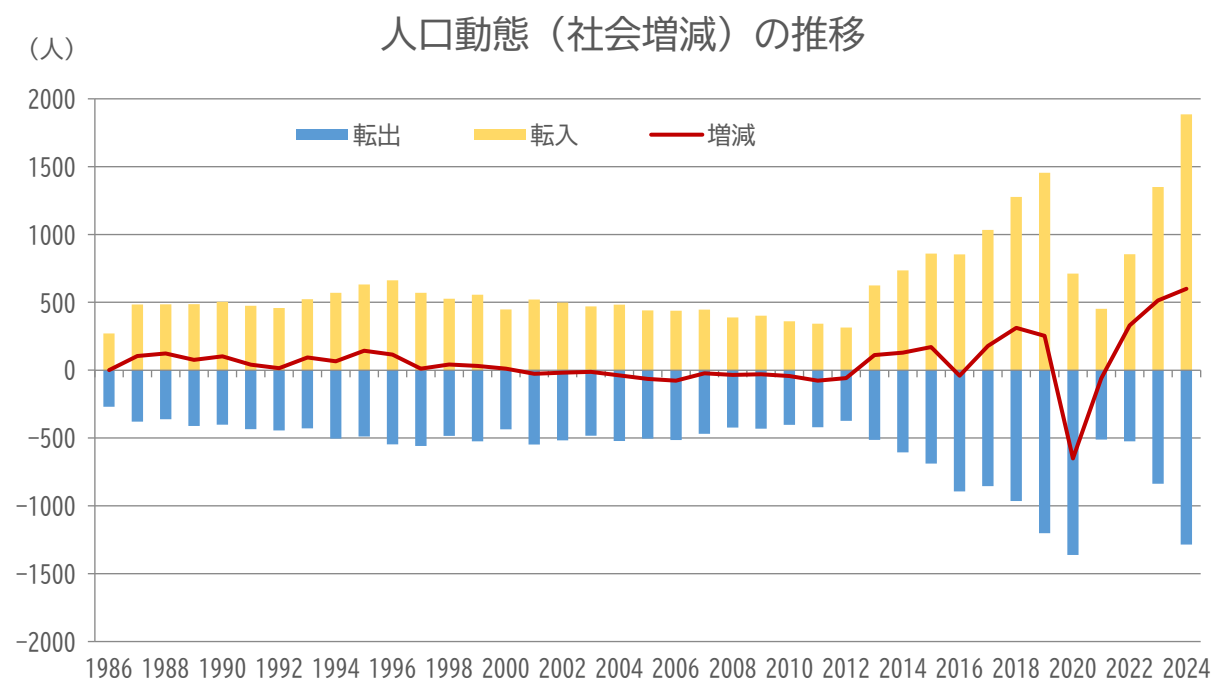
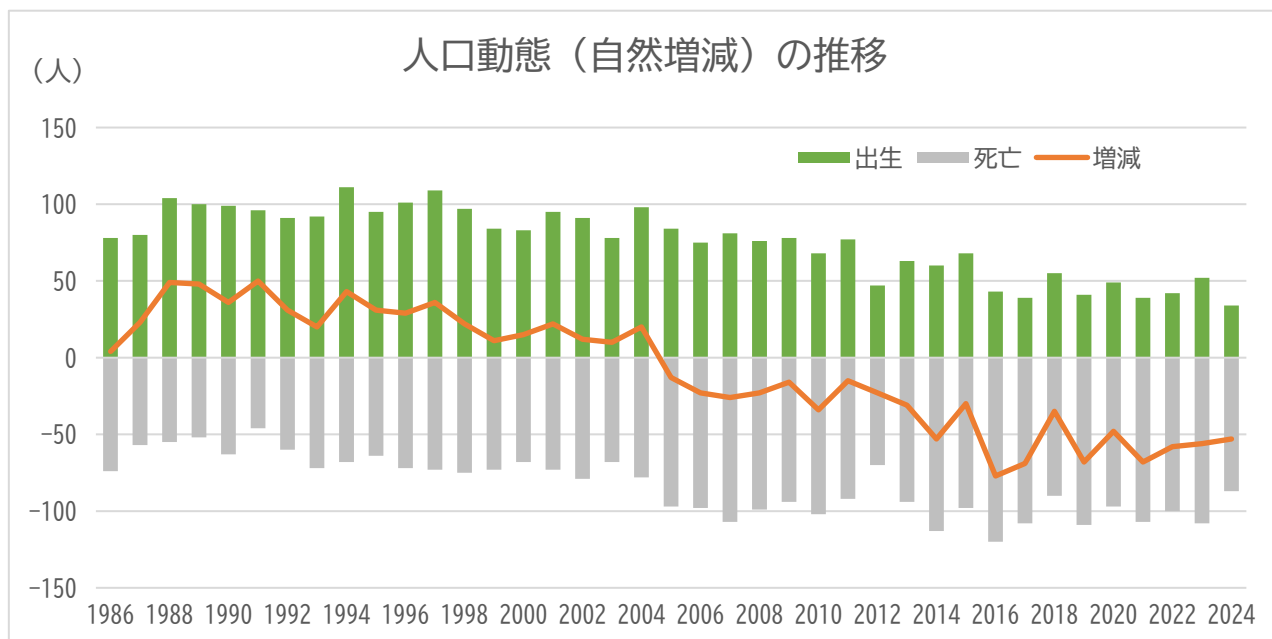


出典：国勢調査、社人研

## エ 出生、死亡、転入及び転出数の推移

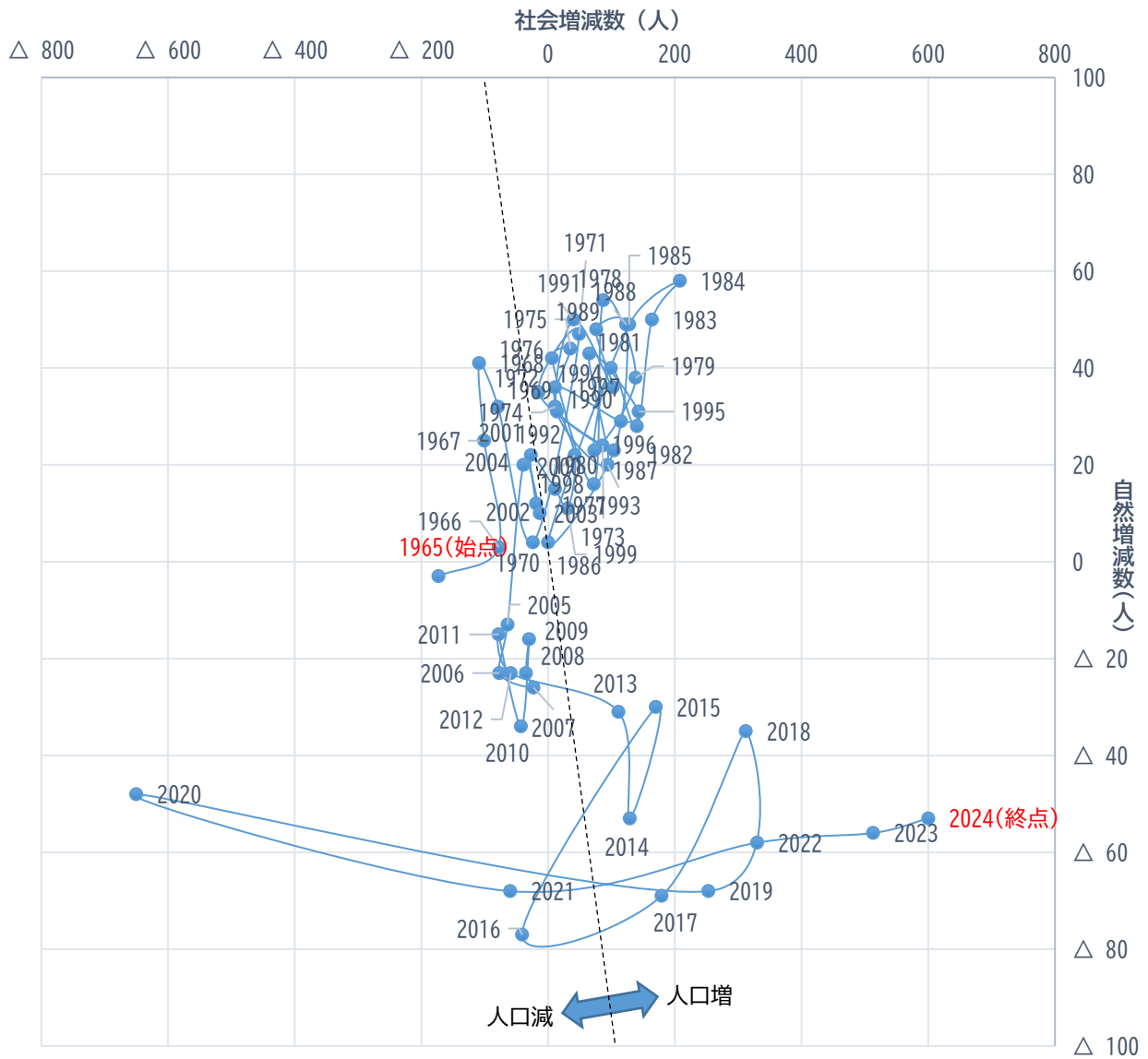
自然増減では、1986年（昭和61年）以降、出生数が死亡数を上回る増加基調が続いてきましたが、2005年に初めて死亡数が出生数を上回り自然減に転じることとなり、その後もその傾向が続いています。

社会増減では、2000年（平成12年）まで転入数が転出数を上回っていましたが、2001年に転出超過に転じました。2013年（平成25年）以降、冬季の短期就労者として滞在する外国人が増加し、転入者・転出者が増加していますが、コロナ禍を除いて概ね社会増（転入超過）となっています。



出典：白馬村人口動態

# 自然増減と社会増減の影響



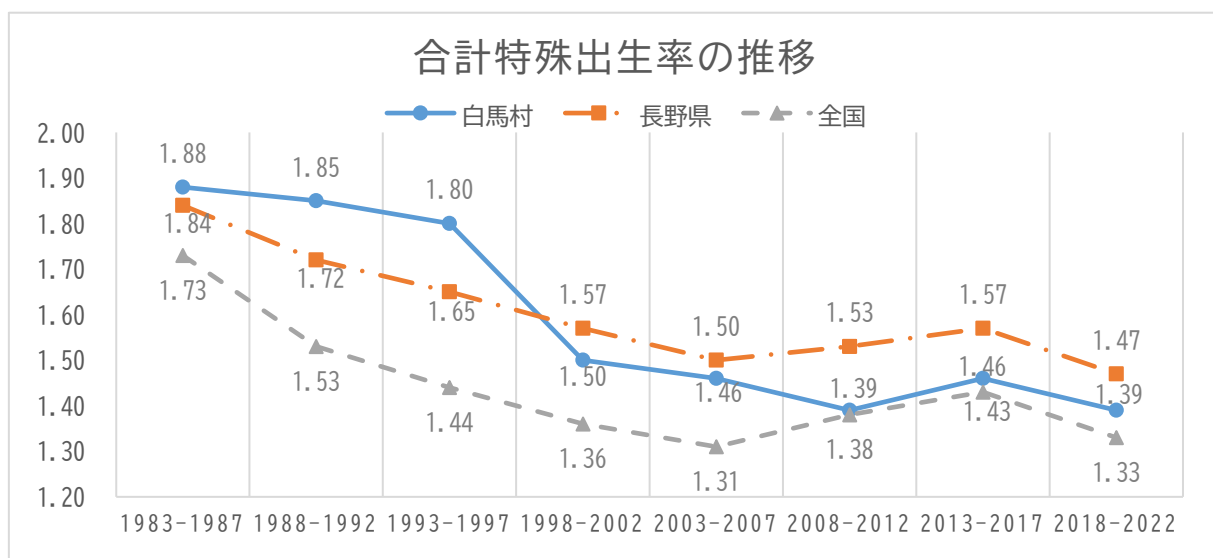
## オ 合計特殊出生率の推移

合計特殊出生率は全国的に減少傾向にあり、白馬村は全国平均を上回っているものの、長野県内では7番目に低い値となっています。

全国的にも白馬村でも、2015年前後までは一度増加に転じたものの、再び減少し、史上最低の水準となっています。

### ※合計特殊出生率

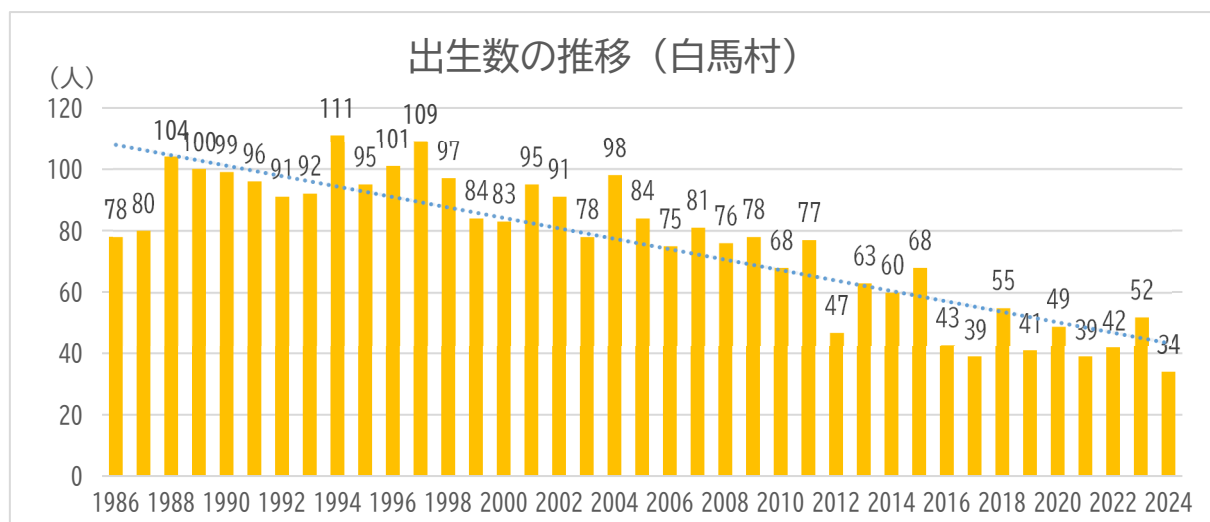
15歳から49歳までの女性の年齢別（年齢階級別）出生率を合計したもので、一人の女性が一生に産む子供の平均数を示したものです。人口動態の出生の動向を見るとき重要な指標となっています。



出典：厚生労働省人口動態統計

## カ 出生数の推移

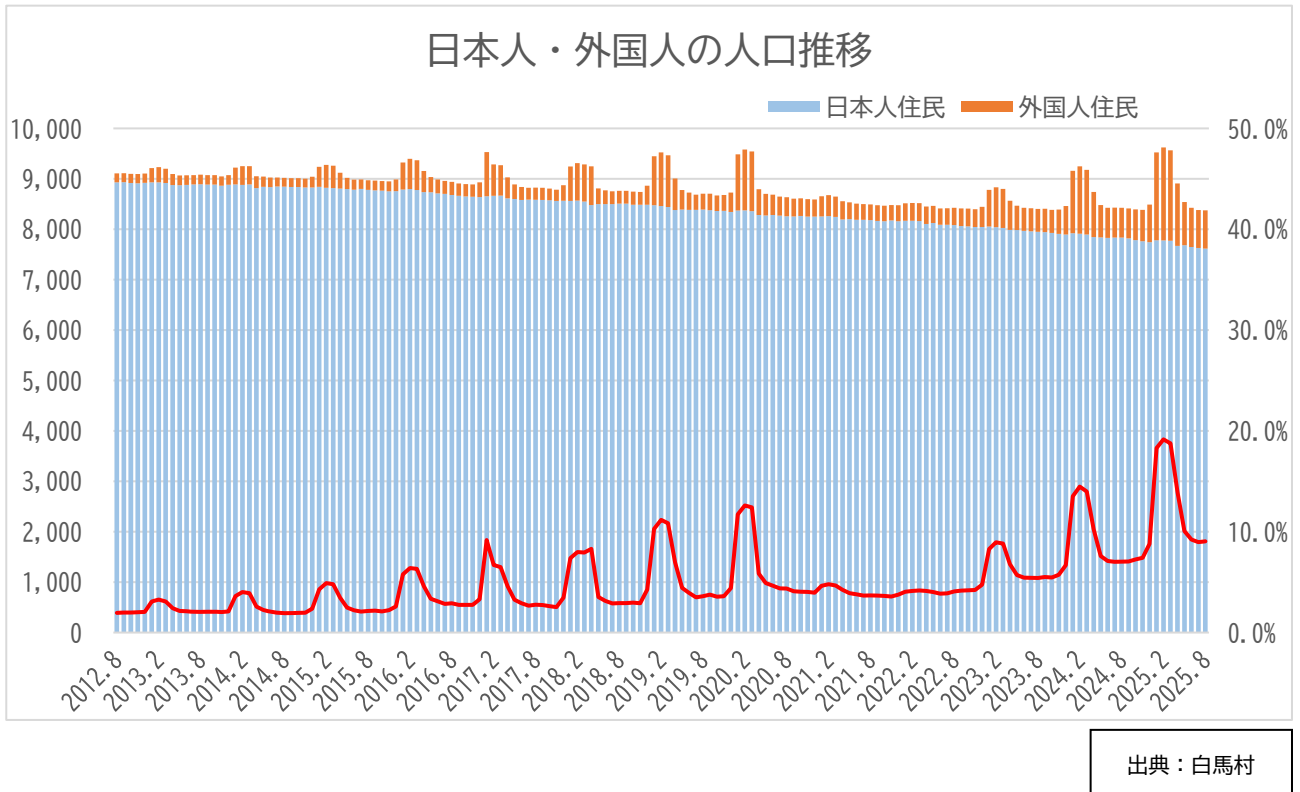
出生数は年々減少傾向にあり、1994（平成6年）には111人でしたが、2024年（令和6年）には34人と最小値を更新しました。年により増減はあるものの、30年間で約70%減少している状況です。



出典：白馬村

## キ 外国人人口の推移

外国人住民は、通年定住者も冬季の短期就労者も増加傾向にあり、春から秋にかけては人口の10%、冬季は人口の20%まで増加しています。定住する外国人はこの10年間で約4倍に増えた一方で、日本人は減少の一途を辿っています。全体的な人口は、グリーンシーズンは微減で、冬季は約9,500人で横ばいとなっています。



## ク 産業別就業者数

第1次産業の就業者が減少し、第3次産業の就業者数が増加する傾向にありましたが、近年はほぼ横ばいとなっています。グラフは10月1日を基準日とする国勢調査の数値であり、冬季には第3次産業の就業者がさらに多くなると考えられます。

